受賞作品（50音順）

大賞 01 ｜ bird house
02 ｜ アロン化成ものづくりセンター
03 ｜ 透明な地形
04 ｜ 母の家
05 ｜ 松坂屋久屋南パークテラス
06 ｜ まどか有松・緑のネットワーク
07 ｜ 美浜の家

選考基準

良好なまちづくりを進めていくためには、建築物及びまちなみが地域環境の形成に積極的に関わり、一定の社会的役割を果たしていくことが重要であるという認識の下、募集条件に適合しているもののうち、良好なまちなみ景観の形成や潤いのあるまちづくりに寄与する等、良好な地域環境の形成に貢献していると認められる建築物又はまちなみで、次の基準のいずれかに適合し、かつ社会的貢献度の高いものを選考する。

1 地域における新しい建築文化の創造に寄与しているもの。

（以下例示）
- 新しい地域景観の形成を先導し、モデルとなるもの。
- デザインに優れ、地域環境の形成又は新しい地域環境の創造に寄与しているもの。
- 周囲への配慮がなされ、地域の魅力を高めているもの。

2 地域のまちなみに調和し、魅力的な景観の形成に寄与しているもの。

（以下例示）
- 地域の風土を生かし、新しい地域文化を創造しているもの。
- まちなみに調和し、地域の特色ある景観を創造しているもの。
- 建築協定等の住民の主体的な活動や総合的な計画等により、まちなみ景観が形成されているもの。

3 魅力と潤いのある空間の創造に寄与しているもの。

（以下例示）
- 緑化、せせらぎ等の、地域に魅力と潤いを与える空間を創出しているもの。
- 通り抜け空間や開放ギャラリー等の、地域コミュニティの形成に寄与しているもの。
- 地区計画等の詳細な整備計画や住民活動等により、良好な地域整備が図られているもの。

4 その他、本賞の趣旨に適合し、地域に貢献しているもの。

選考経過

推薦・応募対象	愛知県内で、平成19年4月1日から平成24年8月10日までに建築又は改修等された建築物やまちなみで、選考基準に該当するもの。
推薦・応募期間	平成24年6月20日から平成24年8月10日まで
推薦・応募総数	106通（98作品）
第1回選考委員会	平成24年8月29日 一次選考を行い、21作品が通過
第2回選考委員会	平成24年10月17日 二次選考を行い、7作品が受賞 （うち1作品を大賞に選出）
表彰式	平成24年12月19日

選考委員（順不同／敬称略／●印は選考委員長）

- ● 有賀 隆 早稲田大学理工学術院教授
- 生田 京子 名城大学准教授
- 伊藤 恭行 名古屋市立大学教授
- 岡田 憲久 名古屋造形大学教授
- 北川 啓介 名古屋工業大学大学院准教授
- 伏見 清香 広島国際学院大学教授
- 佐藤 東亜男 公益社団法人愛知建築士会会長
- 朝岡 市郎 社団法人愛知県建築士事務所協会会長
- 鈴木 利明 社団法人日本建築家協会東海支部愛知地域会会長
- 松井 宏夫 愛知県建設部建築担当局長

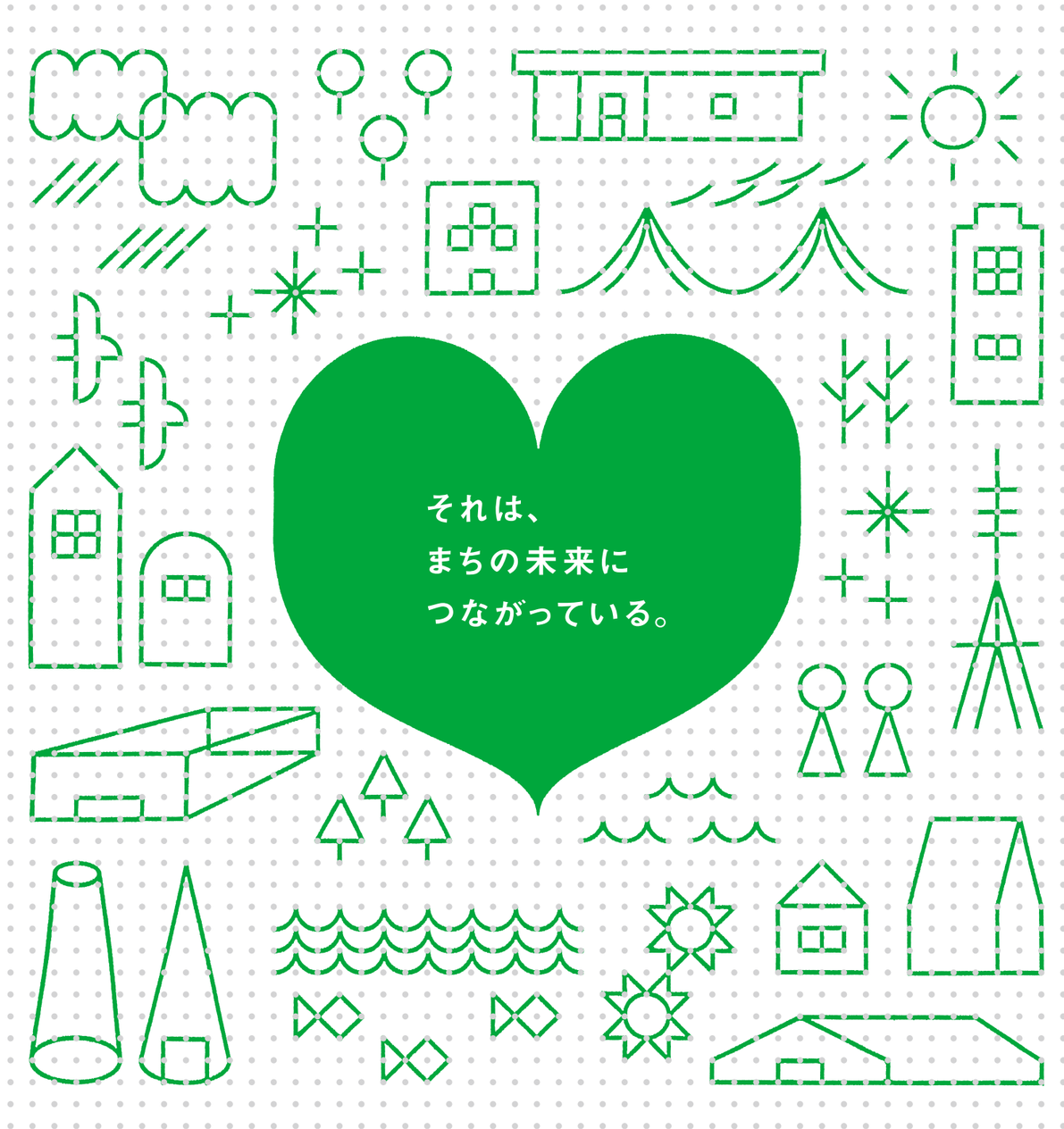
主催：愛知県
後援：愛知県市長会／愛知県町村会／愛知県商工会議所連合会／愛知県都市計画協会／中部経済同友会
協賛：（公社）愛知建築士会／（社）愛知県建築士事務所協会／（社）日本建築家協会東海支部愛知地域会／（一社）愛知県建設業協会／愛知県建築技術研究会／（財）愛知県建築住宅センター／（一財）東海建築文化センター／中部デザイン協会

建設部公園緑地課
〒460-8501 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号
TEL:052-954-6612（ダイヤルイン）
MAIL:koen@pref.aichi.lg.jp

愛知県

Art Direction + Design 高柳 新／村松 弘友紀(LUKE)
2013.1

第20回 愛知まちなみ建築賞 | 表彰作品集 2012



愛知まちなみ建築賞について

AICHI
MACHINAMI
KENCHIKU
SHO

愛知県では、魅力的な地域づくりには良好な景観形成が必要と考え、自然、歴史、生活、産業などの景観特性を生かし、未来につなぐ緑豊かな「美しい愛知づくり」を推進しています。

平成5年に創設された「愛知まちなみ建築賞」は、おかげさまで今回で20回目を迎えることができました。県民の皆様方をはじめ、熱心に審査していただいた歴代の選考委員の皆様、後援・協賛団体の方々に深く感謝申し上げます。

本賞は、新しいまちなみ景観の形成を図るものや、まちなみに調和し地域の特色ある景観を創造しているものなど、社会的貢献度の高い建築物やまちなみを表彰する制度として創設されました。今回までに応募総数2,600件を超え、このうち137作品が「愛知まちなみ建築賞」を受賞し、中でも特に優秀な8作品は「愛知まちなみ建築賞大賞」に選出されました。

今までの受賞作品を振り返ると、ビルの谷間にあって静寂な和のスペースを持ったもの、老朽化していた公会堂や事務所ビルを地域のシンボルとして再生した上でまちづくりの核として機能させているもの、独創的な発想で既存の社員寮を美術館へ大胆に転用したもの、また、手間を惜しまずワークショップ形式で合意形成を図る設計手法を採っているものなど、先進的でかつユニークなものが数多くありました。この20回目を記念して、これまでの「愛知まちなみ建築賞」の歩みを作成しました。是非ご覧ください。

さて、本年度は「それは、まちの未来につながっている。」というメッセージを添えて募集したところ、106点の応募をいただき誠にありがとうございました。

これら多くの作品の中から選考委員会での厳正かつ熱心な審査の結果、7作品が受賞することになりました。さらにこの中から「愛知まちなみ建築賞大賞」が4年ぶりに選出され、20回目という節目を盛り上げてくれることになりました。

今回の受賞作品は本賞の名前のとおり、愛知の「まちなみ」および「建築」をけん引していく作品として高く評価されるものであり、地域の良好な景観づくりに大きく貢献していくことを願っています。

今後とも、意欲的な作品が応募されることを期待しつつ「愛知まちなみ建築賞」を通して県民の皆様と連携して「美しい愛知づくり」に取り組んでまいりますので、引き続き皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

愛知県知事
大村秀章
HIDEAKI OMURA

愛知まちなみ建築賞 総評

1990年代以降、この20年間は地方分権と地域主権の礎となる市民社会の仕組みが形づくられた時代であり、これと歩みを同じくして地域の住民、市民、企業、自治体が主体となる建築やまちづくりが試行錯誤を繰り返しながら、新たな建築文化の創造と魅力ある地域づくりの成果をあげて来た時代とも言える。

今年の「愛知まちなみ建築賞」は1993年の創設から数えてちょうど第20回目の節目となる年である。県内各地域から総数106点の作品応募をいただいた。第1次選考ではこの中から21点の候補作品に絞ったが、その後の過程で、このうち1作品が愛知県「人にやさしい街づくり条例」に適合していない建築物であることが判明したため選考対象から除外した。10月17日の第2次選考では作品ごとの詳細資料・図面ならびに現地撮影した映像資料を用いて選考委員全員による評議を行なった。対象20作品はいずれも優れたもので、委員による活発な議論が交わされ全体合議によって、受賞作ならびに大賞を最終決定した。

選考の結果は、風景のインフラストラクチャーとなる住宅建築の可能性を示しているもの、まちに生き続ける歴史的、文化的な空間の再生と建築との応答関係を緑の修景を通して意欲的に提案しているもの、最先端の技術でものづくりを担う工場地域のランドスケープの創造と自然環境とが繋がる場づくりに挑戦しているもの、メインストリートの人々の賑わいと都市の大きな街路風景という異なる景観スケール（近景・中景・遠景）を媒介する都市建築のあり方を示しているものなどが選ばれ、このまちなみ建築賞に相応しい作品が並ぶこととなった。

とりわけ住宅は個々の設計条件が大きく影響するのだが、大賞を受賞した「bird house」は、急峻な斜面を相手にしてその地形的制約をむしろ建築と自然との接点となる新しい基礎インフラを生みだす好機と捉えている。これまでの切り土盛り土と道路際に連続する段状の土木擁壁というまちなみに対して、斜面を崩さず「スパイク」のように地形をつかむ基礎の計画と構造の実現は、斜面地にある敷地と建築そしてまちなみとの相互関係に新たな応答性を示しそれを具体化させた秀作であり、大賞に値する作品として選考委員全員から高く評価された。

その他の受賞作品の詳しい評価はそれぞれの選評に譲るが、地域ごとに固有の歴史、文化、生態系や自然環境との応答関係を見直し、その成果をまちなみの再生や新しい建築の様相へと具体的にフィードバックさせる設計・計画の思想と方法がはっきり見えてきたことは、本賞を支えてこられたこれまでの全ての選考委員の方々の熱意と事務局各位の並々ならぬ尽力の賜物であり、心より謝意を表したい。

早稲田大学
理工学術院教授
有賀 隆
TAKASHI ARIGA

受賞作品（50音順）

大 賞

01 bird house
[名古屋市天白区]

02 アロン化成
ものづくりセンター
[東海市新宝町]

03 透明な地形
[岡崎市明大寺町]

04 母の家
[蒲郡市拾石町]

05 松坂屋
久屋南パークテラス
[名古屋市中区栄]

06 まどか有松・
緑のネットワーク
[名古屋市緑区有松]

07 美浜の家
[知多郡美浜町]

練り込み技法による記念銘板
作／陶芸家 水野教雄

01

大賞

bird house

ばーどはうす

名古屋市天白区

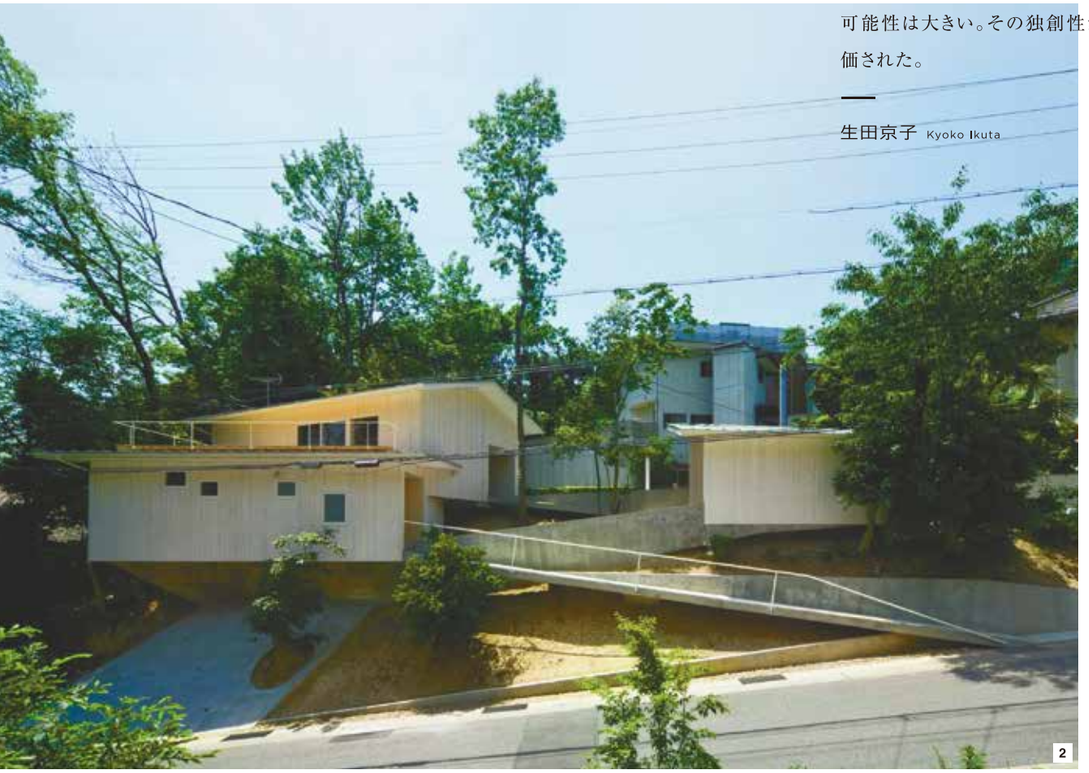
この建物は、30度を超える斜面地にひっかかるようにして建っている。建物を1つの大きな塊とすることなく分棟構成とし、ひっかかりが多く小さな基礎で斜面地にとりついている。その軽やかな接地方法が最大の特徴であろう。

一般に斜面地に下から入る住宅の計画では、堅固な擁壁をつくりその上に住宅をのせるのが常套手段であるが、作者は緑が濃く生い茂るこのエリアの景観に配慮し、新たな一石を投じた。すなわち擁壁で土を征服するのではなく、緑が生い茂る余地をできるだけ残し、つつましやかな住宅を建てる方法をとったのである。

また周辺への開放性にも独特の配慮がある。細長い角地において敷地境界に壁を建てることなく、先端に小さな離れ、奥に住宅という構成でぎりぎりのプライバシーを確保し、それらをつなぐ通路は外部空間を楽しむ場ともなっている。使われ方によって生活をいかようにも近隣に開いていける可能性を秘めた建物である。

木と木の間にbird houseをかけるごとく軽やかな傾斜地住宅、そこで示された可能性は大きい。その独創性が大いに評価された。

生田京子 Kyoko Ikuta



2,3,4,5 photo/宮本佳明建築設計事務所(2010)

建築主	水野志保
設計者	株式会社宮本佳明建築設計事務所
施工者	株式会社井戸建設
概　要	主要用途　専用住宅
	構　　造　木造
	階　　数　地上2階
	敷地面積　428.21m²
	建築面積　113.74m²
	延床面積　117.46m²

敷地写真。平均斜度30度の急傾斜。

つづら折れ状のRC基礎が完成した状態。

02

アロン化成ものづくりセンター

あろんかせいものづくりせんたー

東海市新宝町

アロン化成ものづくりセンターは名古屋港の工業地域で工場・倉庫が建ち並ぶなかにあって緑ゆたかな自然環境の魅力的なまちなみ景観が創造されている。おそらく、今回で第20回にならんとする“愛知まちなみ建築賞”も工業専用地域内にある建物の受賞は少ないであろう。

建設前の既存の樹木はできる限り残すと共に新たに緑ゆたかな潤い空間、更に建物は樹木と高さをそろえ、建物と樹木がとけ込む景観ばかりか、建物中央にグリーンコートを配し建物内部と外部空間の繋がりなど地域と建物が連係してやすらぎあるまちなみ景観を形成する姿勢が評価された。

敷地内の公園施設（グリーンエリア）は多くの人に憩いの場を提供し、ビオトープなどは周辺地域の環境保護に役立ち、大屋根に降り注ぐ雨水の再利用、外壁に設けた自然石の蓄熱壁に散水による気化熱を利用した冷却装置など人にも地球にも優しい地域を形成している。

朝岡市郎 Ichiro Asaoka

1 photo/SS名古屋(2012)　3 photo/車田保(2011)

建築主	アロン化成株式会社
設計者	株式会社森下建築総研
施工者	安藤建設株式会社名古屋支店
概　要	主要用途　工場・事務所
	構　　造　鉄骨造
	階　　数　地上2階
	敷地面積　22,523.21m²
	建築面積　6,346.53m²
	延床面積　7,039.15m²

03

透明な地形

とうめいなちけい

岡崎市明大寺町

岡崎市中心部に近い住宅地に建つ家族4人のための木造住宅である。

1.5メートルほどの高低差がある40坪ほどの変形した敷地に対して、環境との関係を積極的に強めるかのように平面形状の外形を細い「へ」の字型に屈曲させた上で、立面的、断面的には四つの大きなキューブ状の外部空間や内部空間を貫通するように、個室や風呂、外部テラスなどの住宅の諸室が適材適所に配置された空間構成である。

天候や気候の影響が大きい外部空間に対して少しでも良質な内部空間を築くことが古来からの建築の使命である中で、この住宅では、どの部屋でどのような日常生活のひとこまを送るかを主人公としての住まい手自身が自由に勘案し取捨選択することで、まちなみの一部としてのひとつの建築というよりも、断片的な日常生活の集合体としての建築をなしている。それは、あたかも、朝昼夜、春夏秋冬といった時間の流れの中の生活において、変幻自在な舞台でのひとつの映画がつくりあげられているかのようでもある。

今までの建築がなかなか到達できなかったまちの中での内部空間と外部空間の関係に対して、家族4人の日常生活の中の物語を積極的に広げ深めつつ、さらに、それらに呼応するように、まちからの景色、まちへの景色の両者において透明感のある奥行きを与えることで実現した極めて豊かな景観が、まちなみへも大きく寄与している点が高く評価された。

北川啓介 Keisuke Kitagawa

建築主	近藤禎義
設計者	南川祐輝建築事務所
施工者	箱屋
概　要	主要用途　専用住宅
	構　　造　木造
	階　　数　地上2階
	敷地面積　131.52m²
	建築面積　61.91m²
	延床面積　97.86m²

04

母の家

ははのいえ

蒲郡市拾石町

建築主	吉元学
設計者	株式会社ワーク○キューブ
施工者	有限会社ホシケン
概　要	主要用途　専用住宅
	構　　造　木造
	階　　数　地上1階
	敷地面積　151.93m²
	建築面積　76.68m²
	延床面積　65.87m²

やわらかな草に覆われた大きな屋根が印象的な建築である。前面道路に面して軒先は低く抑えられており、緑の大屋根が周辺にやさしい表情を創り出している。しかし、この建築がまちなみ建築賞に選ばれた理由は、この屋根だけによるものではない。むしろ特筆すべきは、その平面計画にある。住居の前面は全て土間になっており、建具は開放することができる。土間の前には鉢植えの草花が施主によって設えられており、近隣住民との間で自然な会話が交わされている姿を見ることができる。ここでは、私たちの社会がかつて持っていた住居と地域との幸福な関係が成立しているように思われるのだ。

この空間構成は、施主が古くからの住民であり近隣住民が基本的に知り合いであるという地域コミュニティが成立している社会にのみ成立するものだと言ってしまうのは簡単であろう。しかし逆に、この住居は私たちが不可能だと思って捨ててしまった住まい方の姿が、現代社会においても成立しうるのだということ具現化して見せてくれているのだと思う。小さく穏やかな表情を持つ建築だが、現代社会を逆照射するような強靭さを持つ作品となっている。

伊藤恭行 Yasuyuki Ito

1,2 photo/ナカサ＆パートナーズ(2011)　3 photo/ワーク○キューブ(2011)

05

松坂屋久屋南パークテラス

まつざかやひさやみなみぱーくてらす

名古屋市中区栄

100メートルの幅員を持つ久屋大通りに面し、ビルの谷間に位置する間口9mのカフェと美容院を有する2階建商業施設である。両脇の高層ビルから圧迫され萎縮した印象になりがちな立地にも関わらず、まちなみの心地よいアクセントとなっている。葉をモチーフとしながらも直線的な白いフレームのファサードは力強く、両脇の高層ビルを視覚的に支え、繋ぐことを実現した。さらに、北側面にまで回り込むことによって、建築の立体的な顔となると同時に、効果的な場と余白を形成している。

1階のテラスは、内外を柔軟に繋ぎ、屋外の賑わいと緑豊かな風景を店内にまで引き込む。ファサードのガラスは、時刻、天候、季節により変化する風景を映し出し、まちなみと調和している。午前中、穏やかな光が、冬は長く、夏は木漏れ日となって店内に入る。日中は、角度を変え立体感のあるガラスに、空や雲、樹々の緑を映し出す。夜は内外が反転し、温かな照明で店内の人の動きを屋外に伝え、安心感と賑わいを与える。その時々で表情を変えながら屋内外を繋ぎ会話する本建築は、街に潤いを与え、魅力的な景観を形成している。

伏見清香 Kiyoka Fushimi

建築主	株式会社大丸松坂屋百貨店
設計者	株式会社竹中工務店 名古屋一級建築士事務所
施工者	株式会社竹中工務店名古屋支店
概　要	主要用途　飲食店舗・美容院
	構　　造　鉄骨造
	階　　数　地上2階
	敷地面積　235.23m²
	建築面積　209.43m²
	延床面積　397.19m²

1,2,3 photo/車田保(2011)

建築主	服部合資会社
設計者	株式会社竹中工務店名古屋一級建築士事務所+モモアーキテクツ三井富雄(監修)
施工者	株式会社竹中工務店名古屋支店
概　要	主要用途　有料老人ホーム
	構　　造　鉄骨造
	階　　数　地上3階
	敷地面積　2,069.7m²
	建築面積　853.78m²
	延床面積　2,141.83m²

06

まどか有松・緑のネットワーク

まどかありまつ・みどりのねっとわーく

名古屋市緑区有松

長く有松のまちづくりにかかわってきた設計監修者、設計者の熱意と知恵の賜物であり、そうした設計を推進した建築主と事業者の理解とサポートの所産でもある。

岡田憲久 Norihisa Okada

老人ホームまどか有松は名古屋市有松町並み保存地区の周辺地域に位置する。背後には町屋と土蔵が立ち並び、正面には名鉄有松駅、その向こうに大規模商業施設がそびえ、まさに伝統的町並みを守る防波堤の役目を果たしている。

道路側はさしかけ屋根の軒が深い平屋の下屋棟となっており、歴史的な場への関係の在り方を示すデザインとなっている。外囲いの特注の透垣は人工竹でありながらモダンで優しく、適所に樹木の緑が配置されている。居室の手すり格子は細心の間合いが取られ、建築主の屋号をデザイン化する遊び心も見て取れる。

南側の広い庭は手越川に沿って一部遊歩道に接し、敷地内の柳は名古屋市遊歩道へと連続する。私有地と公有地を跨いで続く柳並木は建築主と設計者が市へ要求し実現したそうである。遊歩道からは施設の住人が庭を散歩する姿が見え、歴史的町並みに開かれた豊かさが感じられる。

建物は伝統的意匠を現代的にデザイン変換し、町並みへの配慮が過剰な表現となることなく心地いい。細やかな気配りは

1,2 photo/モモアーキテクツ 三井富雄(2010,2012)　3 photo/アーキフォト KATO 加藤敏明(2011)

07

美浜の家

みはまのいえ

知多郡美浜町

30年ほど前に自然丘陵地を大規模に雛段造成し均質な家々が立ち並ぶ開発分譲住宅群の一画の、「忘れ去られたかのように」残る高低差の大きい不整形なウバメガシの原生林の敷地に、日本(の心)をよく知り日本に暮らすことに決めた外国人芸術家のご夫妻は生活拠点を定めた。気心を知る設計者に家主が託した基本条件は「大地を痛めないこと」と「既存の樹を伐らないこと」、その熱い「地を守る」思いが土地の高低差のまま樹々に埋もれるような古き良き日本の家を創り出した。

地形と既存樹の保全に素直に従った住宅はコンパクトに「く」の字型に配置され、南斜面に開く縁側空間を外に向かって抱きスキップ床の豊かな生活空間を内在して、自然の丘(〜林間)に自然と住まうことの連携で生まれる「まちなみ」を回復再生していることに心から敬意を表しエールを贈る。この環境で2人のお子さんがのびのび育ち、地域の皆さんとのオープンな交流が温かく展開される様子が伝わってきて嬉しくほっとした気分になれる、こういう「家」が私は大好きである。

鈴木利明 Toshiaki Suzuki

建築主	Steven Ward、Ximena Elgueda
設計者	後藤建築設計 後藤孝
施工者	株式会社イシハラスタイル
概　要	主要用途　専用住宅
	構　　造　木造
	階　　数　地上2階
	敷地面積　629.57m²
	建築面積　98.98m²
	延床面積　113.55m²

1,2,3 photo/堀宏之[BORA](2012)